

経済マンスリー

I. 日本

~個人消費のレジリエンス(耐性)が試される 三度目の緊急事態宣言~

Ⅱ. 米国

~米国雇用計画の目的実現のため バイデン政権は共和党との妥結点を模索~

皿. 欧州

~ワクチン効果を織り込み始めるも「春」は遠いサービス業~

Ⅳ. アジア

~観光業の復調時期が見通し難いなか、新国家戦略を策定したタイ~

V. 中国

~国内の観光業にも持ち直しの兆しがみられる中国~

VI. 原油

~原油市場を取り巻く環境(4月)~



I. 日本

~個人消費のレジリエンス(耐性)が試される三度目の緊急事態宣言~

今年初に再発出された緊急事態宣言は3月後半に全面解除されたばかりだが、我が国は早くも「(感染)第4波と言って差し支えない」(政府新型コロナ分科会)状況に直面している。4月に入り、政府は11都府県にまん延防止等重点措置を適用したが、感染拡大は止まらず、25日には東京都、大阪府、京都府、兵庫県に5月11日を期限とする三度目の緊急事態宣言が発出された。これら措置の対象地域の実質GDPシェア合計は5割弱だが、実際には他の地域でも時短営業要請が実施されており、これらを含めた実質GDPシェアは約6割となり、二度目の緊急事態宣言対象地域に近い水準に上る(第1表)。制限措置については、まん延防止等重点措置適用地域では飲食店等に対し20時までの時短営業要請等が実施されているが、今次緊急事態宣言では酒類を提供する飲食店や大型商業施設(生活必需品売り場を除く)に対し休業要請を行うなどより踏み込んだ制限措置が講じられており、二度目の緊急事態宣言と比較してもその内容は厳格といえるだろう。

一方で、コロナ禍の長期化に伴い、制限措置の強度と人出水準は必ずしも比例しなくなっていることに加え、感染防止と経済活動の両立進展を受け、オンライン消費普及等により個人消費も人出と比例しにくくなっている点は留意される(第 1 図)。仮に「人出は、三度目の緊急事態宣言期間中に二度目と同水準まで落ち込み、その後 3 月末水準まで持ち直していく」と仮定した上で、1-2 月の人出と個人消費の関係を当てはめると、4 月の個人消費は 3 月比 \triangle 1.0%、5 月は同 \triangle 3.5%と試算されるが、6 月を横置きとした場合、4-6 月期の個人消費は前期比+1.3%と、下振れしつつも小幅なプラス成長となる(再掲第1図)。

もっとも、今後ワクチン接種進展が期待されるところであるが、足元では感染力が強いとされる変異株中心に感染拡大が続いており、三度目の緊急事態宣言以降も経済制限措置の強化・緩和が繰り返される可能性は否定できない。個人消費は昨年春よりはコロナ禍に対するレジリエンス(耐性)がみられるものの、引き続き下振れリスクにも警戒を怠れまい。

第1表:緊急事態宣言等対象地域(4月28日時点)

	開始日	終了 予定日	適用 都府県	適用市町村	実質GDP シェア(%)
緊			東京都	全域	19.3
宣急	4月25日	5月11日	大阪府	全域	7.1
言事	4月23日	3月11日	兵庫県	全域	3.8
態			京都府	全域	1.9
	4月5日	5月11日	宮城県	仙台市	1.0
ま	4月12日	5月11日	沖縄県	那覇市等9自治体	0.6
重がが	4月20日	5月11日	神奈川県	横浜市、川崎市等9自治体	6.3
	4月20日	5月11日	埼玉県	さいたま市、川口市等15自治体	2.2
置止	4月20日	5月11日	千葉県	市川市、船橋市等12自治体	3.7
等	4月20日	5月11日	愛知県	名古屋市	2.4
	4月25日	5月11日	愛媛県	松山市	0.3
	緊急事態	は宣言及び	まん延防止	等重点措置適用自治体計	48.7
			業要請実施 用外自治体		9.3
	•	•	合計		58.0
【参考	【2021年1月	~3月の緊	急事態宣言	言(11都府県)	60.0
(注)実質	質GDPシェアは	2017年基準で	当室にて箟出(神奈川県及び千葉県は一部市民経済計算がお	た公表のため、主ん

(注)実質GDPシェアは2017年基準で当室にて算出(神奈川県及び千葉県は一部市民経済計算が未公表のため、まん 延防止等重点措置適用地域に一括計上)。 優移)内関係、各自治体統計とり三参UFB銀行経済調査室件成

第1図:人出(小売・娯楽施設)と消費総合指数の推移



2. 消費総合指数の点線は、1-2月の消費総合指数と人出の水準の関係を基に、人出の予測値から算出した推計値。

(資料)内閣府、Google社統計より三菱UFJ銀行経済調査室作成

(山田 遼)

主要経済金融指標(日本) 2021年4月28日時点

経済調査室(Economic Research Office)

1. 実体経済

(特記なき限り前期(月)比、()内は前年比%、[]内は前年実績)

業別区伊吹兵宗 (納賀七平子) 10.3 ▲ 33 ▲ 4.93		and other stee	and a fee of		2020年		202	0年		2021年	
 (本)103) (本)253 (本)403 (本)553 (本)403 (本)503 (本)503<th></th><th>2018年度</th><th>2019年度</th><th>4-6月期</th><th>7-9月期</th><th>10-12月期</th><th>11月</th><th>12月</th><th>1月</th><th>2月</th><th>3月</th>		2018年度	2019年度	4-6月期	7-9月期	10-12月期	11月	12月	1月	2月	3月
表工業年活物	実質GDP成長率(前期比年率)	0.3	▲ 0.3	▲ 29.3	22.8	11.7	***				***
接て書出作物策 0 2 A 3.6 A 160 9 92 F 59 O A 4.7 (A 2.9) (A 3.0) (A 2.9) (A 3.0) (A 2.0) (A 3.0) ((▲ 10.3)	(▲ 5.8)	(▲ 1.4)	***	***	***	***	***
展工業団件教験 02 本 16 本 16 9 92 59 09 405 20 A15 A25 (A23) (A23) A23	鉱工業生産指数	0.3	▲ 3.8	▲ 16.8	9.0	5.7	0.7	▲0.2	3.1	▲ 1.3	
関加在原始数 0.2 2.8 本41 A 3.2 (A 5.5) (A 5.5) (A 5.7) (A				(▲ 20.3)	(▲ 13.0)	(▲ 3.5)	(▲ 4.1)	(▲ 2.9)	(▲ 5.3)	(▲ 2.0)	
現る住事語答 0.2 2.8 本4.4 3.32 本1.6 本2.9 (A.5.3) (A.5.7) (A.5.8.4) (A.9.1) (A.9.5.4) (A.9	鉱工業出荷指数	0.2	▲ 3.6	▲ 16.9	9.2	5.9	0.9	▲0.6	2.9	▲ 1.3	
生産産製造品庫率物数 105.0 12.5 1				(▲ 20.3)	(▲ 13.5)	(▲ 3.5)	(▲ 4.1)	(▲ 3.2)	(▲ 5.3)	(▲ 3.2)	
1950 1125 142. 114.6 114.6 114.5 116.7 119.8 119.0	製品在庫指数	0.2	2.8	▲ 4.1	▲ 3.2	▲ 1.6	▲ 1.2	0.6	▲0.9	▲0.7	
1073 1146 1150 1150 1150 11159 1212 1213 12				(▲3.3)	(▲5.7)	(▲8.4)	(▲9.1)	(▲8.4)	(▲10.2)	(▲9.5)	
第3次産業活動情報 1.1 本0.7 本10.1 (6.4 2.3 C.0 A.0 (A.0.5) (A.5.0) (生産者製品在庫率指数	105.0	112.5	142.1	124.0	114.6	114.2	114.3	108.7	109.8	
(A 3.1)	(2015年=100)			[107.3]	[109.3]	[114.6]	[115.0]	[115.6]	[116.0]	[113.9]	[121.4
国性企業物価格数 2.2 0.1 A 2.5 0.9 A 0.7 A 0.1 0.5 0.6 0.6 0.6 (A 2.3 (A 2.3) (A 2.8) (A 2.1) (A 2.8) (A 2.0) (A 1.6) (A 0.6) (I 1 前妻者物価 (A 2.3) (A 0.8) (A 2.1) (A 2.0) (A 1.0) (A 0.6) (I 1 前妻者物価 (A 0.0) (A 0.	第3次産業活動指数	1.1	▲ 0.7	▲ 10.1	6.4	2.3	0.0	▲ 0.4	▲ 1.0	0.3	
株 名 2				(▲ 13.1)	(▲ 8.6)	(▲ 2.9)	(▲ 3.8)	(▲ 3.5)	(▲ 5.4)	(▲ 5.0)	
耐食性の低 0.8 0.6 A0.3 A0.2 A0.2 A0.1 0.0 (A.0.0)	国内企業物価指数	2.2	0.1	▲ 2.5	0.9	▲ 0.2	▲ 0.1	0.5	0.4	0.6	0.0
(今曜所・全暦・食品)除く生酵食品)				(▲ 2.3)	(▲ 0.8)	(▲ 2.1)	(▲ 2.3)	(▲ 2.0)	(▲ 1.6)	(▲ 0.6)	(1.0
総称半計数 102.5 98.2 75.3 88.1 92.6 91.9 92.7 95.7 93.0 [93.0] 1021年100)	消費者物価	0.8	0.6	▲0.3	▲0.2	▲ 0.2	▲ 0.1	0.0	0.5	0.1	0.2
100.21	(季調済、全国、除く生鮮食品)			(▲0.1)	(▲0.2)	(▲0.9)	(▲ 0.9)	(▲ 1.0)	(▲ 0.6)	(▲ 0.4)	(▲ 0.1
機械会社 (A 19.1) (A 19	稼働率指数	102.5	98.2	75.3	85.1	92.6	91.9	92.7	95.7	93.0	
総約、電力を除く民傷)	(2015年=100)			[102.1]	[100.2]	[95.6]	[95.6]	[94.9]	[95.7]	[95.0]	[93.0
製造業 3.8 ▲ 8.1 ▲ 12.9 3.1 11.4 ▲ 1.6 10.3 ▲ 4.2 ▲ 5.5 非製造業 2.1 6.2 ▲ 8.5 ▲ 2.2 15.5 3.4 4.9 ▲ 8.9 ▲ 10.9 (除公報始出電力) ▲ 0.2 ▲ 5.5 ▲ 6.3 ▲ 1.6 5.2 3.4 4.9 ▲ 8.9 ▲ 10.9 (除公報始間で) ▲ 0.2 ▲ 5.5 ▲ 6.3 ▲ 1.6 5.2 3.7 ▲ 1.1 9.6 ▲ 0.9 (除公報機関) ▲ 1.6 ▲ 5.5 ▲ 6.3 ▲ 1.6 5.2 3.7 ▲ 1.1 9.6 ▲ 0.9 (除公報機関) ▲ 1.5 ▲ 5.5 ▲ 6.3 ▲ 1.6 5.2 3.7 ▲ 1.1 9.6 ▲ 0.9 (除公報機関) ▲ 1.5 ▲ 5.5 ▲ 11.7 (▲ 6.8) (▲ 1.9) (▲ 4.7) (▲ 5.4) (▲ 0.0) (6.3) (基費 ▲ 1.5 ▲ 5.5 (▲ 11.7) (▲ 6.8) (▲ 1.9) (▲ 4.7) (▲ 1.3) (14.1) (2.5) (基費 ▲ 1.5 ▲ 5.5 (▲ 11.7) (▲ 6.8) (▲ 1.9) (▲ 4.7) (▲ 1.3) (14.1) (4.8) (▲ 0.1) 室台 ※ 1.5 ▲ 1.5 ▲ 5.5 (▲ 6.3) (▲ 1.7) (▲ 1.4) (▲ 7.3) <td< td=""><td>機械受注</td><td>2.8</td><td>▲ 0.3</td><td>▲10.4</td><td>▲0.3</td><td>12.9</td><td>1.1</td><td>5.3</td><td>▲4.5</td><td>▲8.5</td><td></td></td<>	機械受注	2.8	▲ 0.3	▲ 10.4	▲0.3	12.9	1.1	5.3	▲ 4.5	▲8.5	
(▲19.9) (▲15.0) (0.8) (▲3.1) (3.9) (1.1) (▲2.8) 非製造業	(船舶、電力を除く民需)			(▲ 19.1)	(▲ 14.1)	(1.2)	(▲ 11.3)	(11.8)	(1.5)	(▲ 7.1)	
拝製造業	製造業	3.8	▲ 8.1	▲ 12.9	3.1	11.4	▲ 1.6	10.3	▲ 4.2	▲ 5.5	
(除る船舶、電力) (本 18-4) (本 13-4) (1.4) (本 17.1) (18.1) (1.7) (本 10.1) (京 4月14) (本 17.1) (18.1) (1.7) (本 10.1) (京 4月14) (本 18.4) (x				(▲ 19.9)	(▲ 15.0)	(0.8)	(▲ 3.1)	(3.9)	(1.1)	(▲ 2.8)	
資本財出荷	非製造業	2.1	6.2	▲8.5	▲2.2	15.5	3.4	4.9	▲8.9	▲ 10.9	
(係)(輸送機械) (A12.8) (A18.7) (A0.4) (S.7) (A5.4) (A0.4) (6.3) (施設受注 (A11.7) (A6.8) (A1.9) (A1.3) (A1.1) (A1.	(除く船舶、電力)			(▲ 18.4)	(▲ 13.4)	(1.4)	(▲ 17.1)	(18.1)	(1.7)	(▲ 10.1)	
建設受注 6.5 ▲ 5.9 (▲11.7) (▲6.8) (▲1.9) (▲4.7) (▲1.3) (14.1) (2.5) [民務	資本財出荷	▲ 0.2	▲ 5.5	▲ 6.3	▲ 1.6	5.2	3.7	▲ 1.1	9.6	▲ 0.9	
民務	(除く輸送機械)			(▲12.8)	(▲18.7)	(▲0.4)	(5.7)	(▲5.4)	(▲0.4)	(6.3)	
民需	建設受注	6.5	▲ 5.9		1						
(▲20.6) (▲10.2) (▲8.2) (2.0) (▲11.1) (4.8) (▲0.1)				(▲11.7)	(▲6.8)	(▲1.9)	(▲4.7)	(▲1.3)	(14.1)	(2.5)	
官公庁	民需	14.5	▲ 8.7								
公共工事請負金額 1.1 6.8 (21.1) (24.4) (42.3) (10.2) (48.7) (66.7) (7.1) 新設住宅着工戸数(年幸万戸) 95.3 88.4 80.9 81.3 80.5 81.9 78.4 80.1 80.8 新設住宅産工戸数(年幸万戸) 95.3 88.4 80.9 81.3 80.5 81.9 78.4 80.1 80.8 新設住宅床面積 (1.0) (▲4.5) (▲12.4) (▲10.1) (▲7.0) (▲3.7) (▲9.0) (▲3.1) (▲3.7) 小売業販売額 1.6 ▲0.4 (▲9.3) (▲4.5) (2.1) (0.6) (▲0.2) (▲2.4) (▲1.5) (5. 実質家計消費支出 0.0 ▲0.4 ▲4.5 3.6 4.3 ▲1.6 0.2 ▲7.3 2.4 (全人以上、李鵬済) (▲9.8) (▲8.3) (0.7) (1.1) (▲0.6) (▲6.1) (▲6.6) 字野消費性向 69.2 66.9 54.8 62.7 65.9 66.4 63.4 63.5 [64.9] [66.8] [63.5] (全産業・済、以上) (人2.4) (▲1.1) (▲1.1) (△2.9) (▲1.1) (▲2.4) (▲1.8) (▲2.1) (▲1.8) (▲2.1) (▲1.8) (▲3.0) (▲1.3) (▲0.4) (全産業・5人以上) (人2.4)				(▲20.6)	(▲10.2)	(▲8.2)	(2.0)	(▲11.1)	(4.8)	(▲0.1)	
公共工事請負金額	官公庁	▲ 15.0	▲ 3.2								
(3.4) (7.5) (▲3.4) (▲3.3) (▲8.6) (▲1.4) (▲7.3) (1.5) (★3.4) (▲3.3) (▲8.6) (▲1.4) (▲7.3) (1.5) (★7.3) ((21.1)	(24.4)	(42.3)	(10.2)	(48.7)	(66.7)	(7.1)	
新設住宅着工戸数(年率万戸) 95.3 88.4 80.9 81.3 80.5 81.9 78.4 80.1 80.8 (0.7) (人3.7) (人1.0) (人4.7.3) (人1.2.4) (人10.1) (人4.7.0) (人3.7) (人3.7) (人9.0) (人3.1) (人3.7) (人3.7) 小売業販売額 1.6 人0.4 (人9.3) (人4.5) (人3.8) (人4.13.1) (人7.6) (人4.7) (人7.9) (0.1) (人2.9) (人2.9) (人2.4) (人2.4) (人1.5) (人2.4)	公共工事請負金額	1.1	6.8								
(0.7) (▲7.3) (▲12.4) (▲10.1) (▲7.0) (▲3.7) (▲9.0) (▲3.1) (▲3.7) (★2.9) (小売業販売額 (人4.5) (人13.8) (▲13.1) (▲7.6) (▲4.7) (▲7.9) (0.1) (▲2.9) (小売業販売額 (人9.0) (▲4.7) (▲7.9) (0.1) (▲2.9) (小売業販売額 (人9.0) (▲9.0) (▲4.7) (▲7.9) (0.1) (▲2.9) (人9.0) (人9.0) (▲9.0) (▲9.0) (▲9.0) (▲9.0) (▲9.0) (▲9.0) (▲9.0) (▲9.0) (▲9.0) (▲9.0) (▲9.0) (▲9.0) (▲9.0) (▲9.0) (▲9.0) (▲9.0) (▲9.0) (△9.0) (▲9.0) (△9				(3.4)	(7.5)	(▲3.4)	(▲3.3)	(▲8.6)	(▲1.4)	(▲7.3)	(1.9
新設住宅床面積 (1.0) (▲4.5) (▲13.8) (▲13.1) (▲7.6) (▲4.7) (▲7.9) (0.1) (▲2.9) 小売業販売額	新設住宅着工戸数(年率万戸)	95.3	88.4	80.9	81.3	80.5	81.9	78.4	80.1	80.8	
小売業販売額		(0.7)	(▲7.3)	(▲12.4)	(▲10.1)	(▲7.0)	(▲3.7)	(▲9.0)	(▲3.1)	(▲3.7)	
(▲9.3) (▲4.5) (2.1) (0.6) (▲0.2) (▲2.4) (▲1.5) (5.5) (2.1) (0.6) (▲0.2) (▲2.4) (▲1.5) (5.5) (2.1) (0.6) (▲0.2) (▲2.4) (▲1.5) (5.5) (2.1) (0.6) (▲0.2) (▲2.4) (▲1.5) (5.5) (2.1) (0.6) (▲0.6) (▲0.1) (▲0.6) (△0.6) (△0.	新設住宅床面積	(1.0)	(▲4.5)	(▲13.8)	(▲13.1)	(▲7.6)	(▲4.7)	(▲7.9)	(0.1)	(▲2.9)	
実質家計消費支出 0.0 ▲ 0.4 ▲ 4.5 3.6 4.3 ▲ 1.6 0.2 ▲ 7.3 2.4 (2人以上、季調済)	小売業販売額	1.6	▲ 0.4								
(全人以上、季調済) (▲ 9.8) (▲ 8.3) (0.7) (1.1) (▲ 0.6) (▲ 6.1) (▲ 6.6) (平均消費性向 69.2 66.9 54.8 62.7 65.9 66.4 64.4 63.4 63.5 (実数、季調済、%) [66.9] [71.8] (65.5] [66.8] [63.5] [64.9] (66.8] [63.7] (全産業・5人以上) (▲ 2.5 ▲ 19.5 11.1 2.9 0.0 1.3 0.5 ▲ 2.0 (全産業・5人以上) (▲ 24.4) (▲ 14.6) (▲ 9.6) (▲ 10.2) (▲ 7.6) (▲ 8.0) (▲ 9.7) (全産業・5人以上) (▲ 1.7) (▲ 1.2) (▲ 2.1) (▲ 1.8) (▲ 3.0) (▲ 1.3) (▲ 0.4) (全産業・5人以上、万人) (▲ 1.6) (東数、季調済、倍) (1.62) [1.60] [1.57] [1.57] [1.57] [1.55] [1.51] [1.45]				(▲9.3)	(▲4.5)	(2.1)	(0.6)	(▲0.2)	(▲2.4)	(▲1.5)	(5.2)
平均消費性向 69.2 66.9 54.8 62.7 65.9 66.4 64.4 63.4 63.5 (実数、季調済、%) [66.9] [71.8] [65.5] [66.8] [63.5] [64.9] [64.9] [66.8] [63.5] [64.9]	実質家計消費支出	0.0	▲ 0.4	▲ 4.5	3.6	4.3	▲ 1.6	0.2	▲ 7.3	2.4	
(実数、季調済、%) [66.9] [71.8] [65.5] [66.8] [63.5] [64.9] [66.8] [63.5] 所定外労働時間 ▲ 1.7 ▲ 2.5 ▲ 19.5 11.1 2.9 0.0 1.3 0.5 ▲ 2.0 (全産業・5人以上) (▲ 24.4) (▲ 14.6) (▲ 9.6) (▲ 10.2) (▲ 7.6) (▲ 8.0) (▲ 9.7) 現金給与総額 0.9 0.0 (▲ 1.7) (▲ 1.2) (▲ 2.1) (▲ 1.8) (▲ 3.0) (▲ 1.3) (▲ 0.4) 常用雇用者数(前年差) 1 96 43 35 35 34 35 29 28 (全産業・5人以上、万人) 1 96 43 35 35 34 35 29 28 (全産業・5人以上、万人) 1 96 43 35 10 1.05 1.10 1.09 (実数、季調済、倍) 1.62 1.55 1.20 1.06 1.04 1.05 1.05 1.10 1.09 (実数、季調済、%) 1.62 1.62 1.62 1.60 1.57 1.57 1.55 1.51 1.45 1.45 完全大業率 2.4 2.4 2.7 3.0 3.0 3.0 3.0 2.9 2.9 (実数、季調済、%) 長気ウナッチャー(現代判断DI) 47.7 3	(2人以上、季調済)			(▲ 9.8)	(▲ 8.3)	(0.7)	(1.1)	(▲ 0.6)	(▲ 6.1)	(▲ 6.6)	
所定外労働時間	平均消費性向	69.2	66.9	54.8	62.7	65.9	66.4	64.4	63.4	63.5	
(全産業・5人以上) (▲24.4) (▲14.6) (▲9.6) (▲10.2) (▲7.6) (▲8.0) (▲9.7) 現金給与総額 (人2年業・5人以上) (▲1.2) (▲1.8) (▲3.0) (▲1.3) (▲0.4) (全産業・5人以上、万人) (人2.1) (▲1.8) (▲3.0) (▲1.3) (▲0.4) (★1.7) (★1.2) (★1.8) (▲1.8) (▲3.0) (▲1.3) (▲0.4) (★1.8) ((実数、季調済、%)			[66.9]	[71.8]	[65.5]	[66.8]	[63.5]	[64.9]	[66.8]	[63.0
現金給与総額 (全産業・5人以上) 常用雇用者数(前年差) (全産業・5人以上、万人) 有効求人倍率 (実数、季調済、倍) 完全失業率 2.4 2.4 2.7 3.0 3.0 3.0 3.0 3.0 2.9 2.9 (実数、季調済、%) 展気ウナッチャー(現状判断DI) 47.7 38.7 22.1 44.6 43.7 43.8 34.3 31.2 41.3 45 (季調済、%ポイント) (全産業・5人以上、万人) (本1.2) (本2.1) (本1.8) (本3.0) (本1.3) (本0.4) (本1.8) (本3.0) (本1.3) (本0.4) (本0.4) (本1.8)	所定外労働時間	▲ 1.7	▲ 2.5	▲19.5	11.1	2.9	0.0	1.3	0.5	▲2.0	
(全産業・5人以上) (▲1.2) (▲2.1) (▲1.8) (▲3.0) (▲1.3) (▲0.4) 常用雇用者数(前年差) 1 96 43 35 35 35 34 35 29 28 (全産業・5人以上、万人) 有効求人倍率 1.62 1.55 1.20 1.06 1.04 1.05 1.05 1.10 1.09 (実数、季調済、倍) [1.62] [1.60] [1.57] [1.57] [1.55] [1.51] [1.45] [1.45] [2.24 2.4 2.7 3.0 3.0 3.0 3.0 3.0 2.9 2.9 (実数、季調済、%) 景気ウォッチャー(現状判断DI) 47.7 38.7 22.1 44.6 43.7 43.8 34.3 31.2 41.3 45 (季調済、%ポイント) [45.7] [43.5] [37.1] [37.2] [38.3] [41.9] [27.9] [14. 企業倒産件数 8,110 8,631 1,837 2,021 1,751 569 558 474 446 6.	(全産業・5人以上)			(▲24.4)	(▲14.6)	(▲9.6)	(▲10.2)	(▲7.6)	(▲8.0)	(▲9.7)	
常用雇用者数 (前年差) 1 96 43 35 35 34 35 29 28 (全産業・5人以上、万人) 有効求人倍率 1.62 1.55 1.20 1.06 1.04 1.05 1.05 1.10 1.09 (実数・牽調済、倍) [1.62] [1.60] [1.57] [1.57] [1.57] [1.55] [1.51] [1.45] [1.45] [2.4 2.4 2.7 3.0 3.0 3.0 3.0 2.9 2.9 (実数・牽調済、%) 景気ウォッチャー(現状判断DI) 47.7 38.7 22.1 44.6 43.7 43.8 34.3 31.2 41.3 45 (季調済、%ポイント) [45.7] [43.5] [37.1] [37.2] [38.3] [41.9] [27.9] [14. 企業倒産件数 8,110 8,631 1,837 2,021 1,751 569 558 474 446 6.	現金給与総額	0.9	0.0		ì		ì		1		
(全産業・5人以上、万人) 有効求人倍率 1.62 1.55 1.20 1.06 1.04 1.05 1.05 1.10 1.09 (実数、季調済、倍) [1.62] [1.60] [1.57] [1.57] [1.57] [1.55] [1.51] [1.45] [1.45] [1.45] [2.4 2.4 2.7 3.0 3.0 3.0 3.0 3.0 2.9 2.9 (実数、季調済、%) 景気ウォッチャー(現状判断DI) 47.7 38.7 22.1 44.6 43.7 43.8 34.3 31.2 41.3 45 (季調済、%ポイント) [45.7] [43.5] [37.1] [37.2] [38.3] [41.9] [27.9] [14. 企業倒産件数 8,110 8,631 1,837 2,021 1,751 569 558 474 446 6.	(全産業・5人以上)			(▲1.7)	(▲1.2)	(▲2.1)	(▲1.8)	(▲3.0)	(▲1.3)	(▲0.4)	
有効求人倍率 1.62 1.55 1.20 1.06 1.04 1.05 1.05 1.10 1.09 (実数、季調済、倍) [1.62] [1.60] [1.57] [1.57] [1.57] [1.55] [1.51] [1.45]	常用雇用者数(前年差)	1	96	43	35	35	34	35	29	28	
有効求人倍率 1.62 1.55 1.20 1.06 1.04 1.05 1.05 1.10 1.09 (実数、季調済、倍) [1.62] [1.60] [1.57] [1.57] [1.57] [1.55] [1.51] [1.45]	(全産業・5人以上、万人)										
(実数、季調済、倍) [1.62] [1.60] [1.57] [1.57] [1.55] [1.51] [1.45] [1.45] 完全失業率 2.4 2.4 2.7 3.0 3.0 3.0 3.0 2.9 2.9 (実数、季調済、%) 果気ウォッチャー(現状判断DI) 47.7 38.7 22.1 44.6 43.7 43.8 34.3 31.2 41.3 45 (季調済、%ポイント) [45.7] [43.5] [37.1] [37.2] [38.3] [41.9] [27.9] [14. 企業倒産件数 8.110 8.631 1.837 2.021 1.751 569 558 474 446 6.	有効求人倍率	1.62	1.55	1.20	1.06	1.04	1.05	1.05	1.10	1.09	
完全失業率 2.4 2.4 2.7 3.0 3.0 3.0 3.0 2.9 2.9 (実数、季調済、%) 景気ウォッチャー(現状判断DI) 47.7 38.7 22.1 44.6 43.7 43.8 34.3 31.2 41.3 45 (季調済、%ポイント) [45.7] [43.5] [37.1] [37.2] [38.3] [41.9] [27.9] [14. 企業倒産件数 8,110 8,631 1,837 2,021 1,751 569 558 474 446 6.	(実数、季調済、倍)			1			[1.57]	[1.55]	[1.51]	[1.45]	[1.40
(実数、季調済、%) 47.7 38.7 22.1 44.6 43.7 43.8 34.3 31.2 41.3 45 (季調済、%ポイント) [45.7] [43.5] [37.1] [37.2] [38.3] [41.9] [27.9] [14.6 企業倒産件数 8,110 8,631 1,837 2,021 1,751 569 558 474 446 6.	完全失業率	2.4	2.4				. ,		,		
景気ウォッチャー(現状判断DI) 47.7 38.7 22.1 44.6 43.7 43.8 34.3 31.2 41.3 45 (季調済、%ポイント) [45.7] [43.5] [37.1] [37.2] [38.3] [41.9] [27.9] [14. 企業倒産件数 8,110 8,631 1,837 2,021 1,751 569 558 474 446 6.											
(季調済、%ポイント) [45.7] [43.5] [37.1] [37.2] [38.3] [41.9] [27.9] [14.2] 企業倒産件数 8.110 8.631 1.837 2.021 1.751 569 558 474 446 66	景気ウォッチャー(現状判断DI)	47.7	38.7	22.1	44.6	43.7	43.8	34.3	31.2	41.3	49.0
企業倒産件数 8,110 8,631 1,837 2,021 1,751 569 558 474 446 6.									. 3		[14.9
		8.110	8,631					. ,			634
		1									(▲14.3

2

I.日本

2. 国際収支

(特記なき限り前期(月)比、()内は前年比%、[]内は前年実績)

		2018年度	2019年度		2020年			0年	2021年		
		2016年及	2019年度		7-9月期	10-12月期	11月	12月	1月	2月	3月
通	関輸出	1.9	▲ 6.0	(▲25.3)	(▲13.0)	(▲0.7)	(▲4.2)	(2.0)	(6.4)	(▲4.5)	(16.1)
	価格	2.5	▲ 1.6	(▲0.4)	(2.2)	(1.1)	(▲0.2)	(2.1)	(1.0)	(▲0.1)	(3.1)
	数量	▲0.6	▲ 4.4	(▲25.0)	(▲14.9)	(▲1.8)	(▲3.9)	(▲0.1)	(5.3)	(▲4.3)	(12.6)
通	関輸入	7.2	▲ 6.3	(▲15.8)	(▲19.9)	(▲11.8)	(▲11.0)	(▲11.5)	(▲9.4)	(11.9)	(5.8)
	価格	5.7	▲ 4.0	(▲11.8)	(▲9.9)	(▲8.9)	(▲9.1)	(▲9.7)	(▲5.5)	(▲8.3)	(1.8)
	数量	1.4	▲2.4	(▲4.6)	(▲11.1)	(▲3.2)	(▲2.1)	(▲2.0)	(▲4.1)	(22.0)	(3.9)
縚	常収支(億円)	193,980	189,273	14,232	52,844	52,848	18,949	12,791	6,444	29,169	
	貿易収支(億円)	5,658	4,839	▲ 14,566	14,614	25,227	6,074	9,650	▲ 1,301	5,242	
	サービス収支(億円)	▲ 12,172	▲ 17,172	▲ 13,378	▲9,503	▲ 8,412	▲ 1,646	▲ 3,127	▲ 4,809	▲ 757	
金	融収支(億円)	216,356	207,987	15,875	51,340	36,951	12,287	17,447	9,177	16,461	
夕	- 貨準備高(百万ドル)	1,291,813	1,366,177	1,383,164	1,389,779	1,394,680	1,384,615	1,394,680	1,392,058	1,379,412	1,368,465
文	ドル円レート(期中平均)	110.88	108.68	107.60	106.19	104.49	104.40	103.82	103.70	105.36	108.65

3. 金融

		2018年度	2019年度		2020年		202	0年		2021年	
		2016年度	2019年度	4-6月期	7-9月期	10-12月期	11月	12月	1月	2月	3月
無担保コール翌日物金利		▲ 0.062	▲ 0.046	▲ 0.044	▲ 0.039	▲ 0.026	▲ 0.032	▲ 0.026	▲ 0.017	▲ 0.016	▲0.017
				[▲0.060]	[▲0.059]	[▲0.034]	[▲0.043]	[▲0.038]	[▲0.032]	[▲0.016]	[▲0.047]
ユーロ円TIBOR		0.062	0.026	▲ 0.041	▲ 0.062	▲ 0.055	▲ 0.055	▲ 0.055	▲0.055	▲ 0.055	▲0.065
(3ヵ月物)				[0.049]	[0.022]	[0.016]	[0.018]	[0.021]	[0.021]	[0.021]	[0.006]
新発10年国債	利回り	▲ 0.095	0.005	0.030	0.015	0.020	0.030	0.020	0.055	0.150	0.120
				[▲0.165]	[▲0.215]	[▲0.025]	[▲0.080]	[▲0.025]	[▲0.065]	[▲0.155]	[0.005]
都銀貸出約定	平均金利	0.751	0.720	0.670	0.680	0.684	0.681	0.684	0.685	0.683	
(前期、月比増	自滅)			(▲0.050)	(0.010)	(0.004)	(▲0.004)	(0.003)	(0.001)	(▲0.002)	
日経平均株価	i	21,206	18,917	22,288	23,185	27,444	26,434	27,444	27,663	28,966	29,179
(225種、末値))			[21,276]	[21,756]	[23,657]	[23,294]	[23,657]	[23,205]	[21,143]	[18,917]
M2平残		(2.7)	(2.6)	(5.3)	(8.5)	(9.1)	(9.1)	(9.1)	(9.4)	(9.6)	(9.5)
広義流動性平	残	(2.0)	(1.9)	(3.3)	(5.2)	(5.6)	(5.6)	(5.7)	(5.8)	(5.9)	(5.9)
貸出·預金動向	ń										
	銀行•信金計	(2.2)	(2.1)	(4.7)	(6.5)	(6.2)	(6.2)	(6.2)	(6.0)	(6.2)	(6.3)
	銀行計	(2.2)	(2.2)	(4.9)	(6.4)	(5.9)	(5.9)	(5.9)	(5.7)	(5.8)	(5.9)
貸出残高	都銀等	(1.0)	(2.0)	(6.3)	(7.7)	(6.8)	(6.9)	(7.1)	(6.5)	(6.7)	(6.7)
(平残)	地銀	(4.3)	(4.5)	(3.7)	(5.0)	(4.7)	(4.7)	(4.6)	(4.7)	(4.8)	(4.9)
	地銀Ⅱ	(▲0.4)	(▲5.9)	(4.2)	(6.7)	(6.9)	(7.0)	(6.7)	(6.5)	(6.5)	(6.5)
	信金	(2.1)	(1.1)	(2.9)	(7.1)	(8.2)	(8.3)	(8.3)	(8.3)	(8.5)	(8.6)
	3業態計	(3.4)	(2.6)	(6.1)	(8.7)	(9.1)	(9.0)	(9.3)	(9.8)	(10.0)	(9.9)
実質預金	都銀	(4.9)	(3.6)	(8.1)	(10.3)	(10.0)	(9.9)	(10.3)	(11.0)	(11.1)	(10.7)
+CD	地銀	(2.7)	(3.4)	(4.1)	(7.0)	(8.0)	(8.0)	(8.2)	(8.5)	(8.7)	(9.0)
(平残)	地銀Ⅱ	(▲1.3)	(▲5.5)	(3.1)	(6.8)	(8.1)	(8.1)	(8.3)	(8.5)	(8.7)	(8.8)

3

I. 日本

⁽注) 新発10年国債利回り、都銀貸出約定平均金利は末値、その他金利は期中平均値。 (資料)内閣府、経済産業省、財務省、総務省、厚生労働省、国土交通省、日本銀行、東京商工リサーチ、保証事業会社協会統計等より三菱UFJ銀行経済調査室作成

Ⅱ. 米国

~米国雇用計画の目的実現のためバイデン政権は共和党との妥結点を模索~

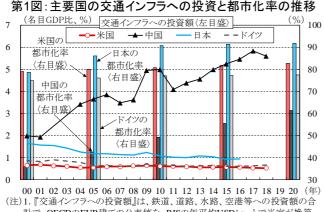
バイデン政権は 3 月 31 日、大規模なインフラ投資計画である「米国雇用計画(American Jobs Plan、以下 AJP)」を公表し、法案可決に向け議会に協力を求めた。AJP は向こう 8 年間で約 2.3 兆ドル規模の投資を行う計画だが、最も多くの金額が割かれている項目が『交通インフラ』で、計画全体の約 25%にあたる 6.210 億ドルに上る。

米国等の先進国は、当然、中国等の新興国と比べると既に都市化が進んでいる(第1図)。各国の交通インフラ投資額を名目 GDP 比でみると、中国が年々上昇傾向にあるのに対し、日米独は1%近辺にて低位安定している(再掲第1図)。しかし、仮に米国で6,210億ドルのうち自動車電動化を除いた約4,500億ドルが8年間にわたり均等に追加投資されれば、年間投資額は現行比1.5倍程度になると見込まれ相応のインパクトを持つことになる

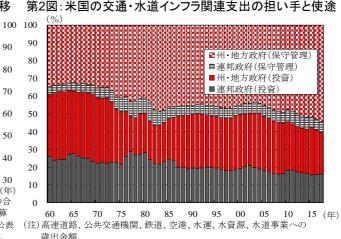
もっとも、AJP を巡っては野党・共和党が規模・内容に難色を示しており、バイデン政権の提案通りに法案が可決されるかは予断を許さない。また、近年、行政が行った交通等へのインフラ関連支出は、新規投資よりも既存構築物の保守管理が中心となっていたことに加え、支出の主体が州・地方政府であることから(第2図)、バイデン政権の思惑通りの成長促進的な投資 (注1) を行うためには、法案を可決させ予算を確保するだけでなく、州・地方政府も巻き込んだ議論や計画立案が不可欠であろう。

AJP 推進に向けては、「財政調整措置」(注 2)の再使用を模索する声もあり、その場合は共和党の反対を押し切る正面突破となる公算が高い。しかし、今月 19 日にはバイデン大統領自ら超党派の議員と会談し共和党との妥結点を模索する意向を示している。上院議員、副大統領合わせ半世紀近く公職を務めた大統領の政治手腕が正に問われている局面と言えよう。

- (注1) ホワイトハウスが公表した AJPの Fact Sheet 冒頭部分で、「AJP は米国への投資を通して、何百万もの雇用を創出し、国内のインフラを刷新することに加え、中国を凌駕する米国の地位を確立する」としている。
- (注 2) 上院(定数 100 議席)では議事進行妨害の打ち切りのために 60 票が必要(民主党は現在 50 議席)だが、 予算決議の中の同措置を用いれば単純過半数で法案成立可能で、3 月の大型経済対策成立に既に用いられた。



00 01 02 03 04 05 06 07 08 09 10 11 12 13 14 15 16 17 18 19 20 (年) (注)1. 『交通インフラへの投資額』は、鉄道、道路、水路、空港等への投資額の合計で、OECDのEUR建ての公表値を、BISの年平均USDレートで当室が換算の上、IMF公表の名目GDPで除したもの。 2. 『都市化率』は国際連合の公表ベースで、日本の2000年から2005年にかけての上昇は市町村合併が影響。(資料)OECD、国際連合、BIS、IMF統計より三菱UFJ銀行経済調査室作成



(資料)米議会予算局(CBO)資料より三菱UFJ銀行経済調査室作成

(田中 隆祐)

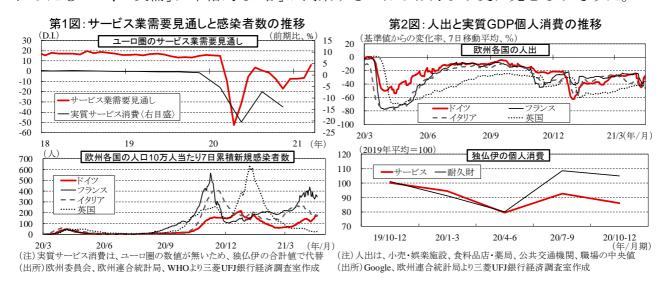
皿. 欧州

~ワクチン効果を織り込み始めるも「春」は遠いサービス業~

3月末に公表された欧州委員会サーベイ(調査期間:3月1日~24日)では、ユーロ圏主要国で新型コロナウイルスの感染第3波の懸念が生じていた時期にも拘わらず、幅広い業種で景況感が改善した。とりわけ、コロナ禍の影響を受けやすいサービス業でも、景況感指数の構成項目の一つであり、実質 GDP のサービス消費に先行する傾向を持つ『需要見通し(先行き3ヵ月)』が、昨年8月以降初めて0を上回った(第1図・上)。

ワクチン接種で先行する英国では、新規感染者数は年始にピークを打った後、ほぼ一貫して減少しており(第1図・下)、ジョンソン首相は2月下旬には制限措置を段階的に緩和する計画を発表していた。ユーロ圏でも、3ヵ月もあればワクチン接種の進展により感染拡大が収まり制限措置も緩和されるとの期待が生じていたとしても不思議ではない。

しかし、足元の感染第3波により、大陸欧州各国は制限措置をむしろ厳格化している。フランスでは4月3日から全土での店舗閉鎖を再導入し、ドイツでも全国一律での厳格な制限措置適用を目指してその実施権限を州政府から連邦政府に移す法案を今月13日に閣議決定した(施行には連邦議会での可決が必要)。注意されるのは、この第3波が、一定の行動制限が残り、人出も第2波前を有意に下回っていたにも拘わらず発生した点で(第2図・上)、ワクチン接種が一定程度進まない限り、各国は厳格な制限を継続せざるを得ず、上記企業景況感結果とは裏腹にサービス業は一段の需要落ち込みに直面する可能性がある。更に、制限緩和後の需要回復も劇的なものとはならないだろう。欧州各国では、昨年7-9月期は感染が抑制され人出も回復したものの、サービス消費の反発は財ほど顕著ではなかった(第2図・下)。感染拡大の収束後も制限措置が直ちに全て撤廃される訳ではない。今月12日に制限緩和に転じた英国でも飲食店は屋外営業のみ許可されており、全面的な規制解除はまだ先の6月予定だ。ワクチン効果への期待からサービス業も「景況感」は底入れしたものの、「実需」に本格的な「春」が到来するのは3ヵ月より更に先となりそうだ。



(矢吹 彩)

Ⅳ. アジア

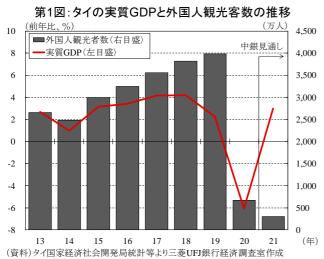
~観光業の復調時期が見通し難いなか、新国家戦略を策定したタイ~

タイでは外国人観光客(2019 年約 4,000 万人)からの観光収入が名目 GDP の 10%程度と観光業への依存度が高く、平時においては経済全体との連動性が高い(第 1 図)。タイ中銀は 3 月に今年の実質 GDP 成長率を前年比+3.0%と予想しているが、達成するにはほぼ零となっている外国人観光客数を年間 300 万人以上まで戻す必要があると想定されている。仮に 10 万人を下回るような状況になれば▲1.7%ポイントの下押しになるとも試算しており、観光業の回復の遅れが景気に直結することが懸念されている。このため、タイ政府は 3 月に外国人観光客に課していた入国後一定期間の隔離を廃止する政策を掲げ、7 月からプーケット等で実施すると発表していたが、足元の新型コロナウイルス感染再拡大を受け、足元では実施が危ぶまれている。世界的な感染収束にもまだ時間を要すると思われる中、外国人観光客誘致のための効果的な政策を実施するのは依然難しい状況であり、観光業の本格的な復調時期は見通し難いといえる。

他方、タイ政府は観光業に大きく依存した経済の脆弱さを認識しており、今年 1 月にはコロナ 禍後を見据えた新たな国家戦略「BCG(バイオ、循環型、グリーン)モデル」を策定している(第 1 表)。これまでは 2016 年策定の「タイランド 4.0」に沿って外資企業を積極的に誘致し産業高度化を目指してきたが、今回はこれに加え、世界的な潮流に合わせ環境を重視する姿勢を鮮明にし、タイの強みである農業分野も環境保全に関連付けて活性化しようとする戦略である。策定に先立ちタイ投資委員会は、BCG 関連の投資を実施した外資企業に対し減税を実施しており、プレスリリースによれば昨年の BCG 関連の対内直接投資は、前年比+17.2%とコロナ禍で全体の投資が大幅な減少となる中でも増加となった模様である。

今回の BCG モデルのコンセプトは環境分野に関心の高い先進国企業の投資ニーズ喚起も期待でき、持続的な成長実現の為の新たな軸となる産業の創出へ向けての糸口となりうる。具体的な投資計画等の枠組み作りはこれからであり、現時点での過度な期待は禁物だが、国際観光の復調に不透明感が漂う中で、観光依存の大きい新興国の新たな発展モデルとして注目されよう。

6



第1表:タイの主要政策 タイランド4.0(2016-2036)

	BCGモデル(2021-2026)
既要	, , , , , , , ,
ŀ	・タイの強みである農業を活かした経済発展を目指す5ヵ年計画
	・「タイランド4.0」から環境重視をより前面に打ち出した戦略
4つ(の戦略
	① 環境保全と資源利用のバランスをとった持続可能性の構築
(② 技術革新による地域経済の発展
(③ BCG経済の下で持続可能な競争力の促進
(④ 国際社会の変化へに対する対応能力の向上
4つ(の重点分野
	① 食品と農業
(② 医療と健康
	③ バイオエネルギー、バイオ素材
-	④ 観光、創造経済(エコ・ツーリズム、スポーツ、文化等)

(野瀬陽平)

IV. アジア

Ⅴ. 中国

~国内の観光業にも持ち直しの兆しがみられる中国~

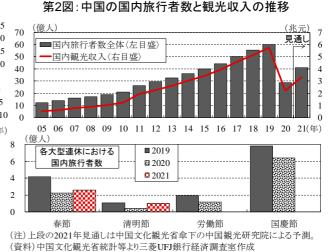
中国の 1-3 月期の実質 GDP 成長率は前年比+18.3%と、コロナ禍の影響でマイナス成長となった昨年の反動から大幅増を記録した。GDP 水準では前期比の伸びが鈍化しつつも、過去の成長トレンド線上で推移している(第 1 図・上)。感染再拡大が生じた一部地域の封鎖により 1-3 月期の飲食店売上がコロナ禍前の水準を下回る等対面サービスの回復が遅れているが(第 1 図・下)、財消費を中心に個人消費が堅調に推移していることに加え、海外景気の持ち直しを受けた輸出の好調により純輸出も全体を押し上げた。

これまで回復が遅れていた対面サービスに関しても、足元で漸く国内観光業に持ち直しの兆しがみられる。中国国内の観光業は、コロナ禍前の 2019 年時点では、旅行者延べ人数が約 60億人、観光収入が約 5.7 兆元(名目 GDP 比 5.8%)と相応の規模を有するものであった(第 2 図・上)。今年に入ってからの国内旅行者数をみると、春節(2 月 11~17 日)は、感染症への警戒が残るなか、1 月の一部地域の感染再拡大に伴い政府が同期間中の帰省自粛を求めたこともあり、コロナ禍前の 2019 年春節と比べ約▲40%の 2.6 億人に止まった(第 2 図・下)。しかし、清明節(4 月 3~5 日)は、北京市内への移動に際し必要だった PCR 検査陰性証明書の提出を低リスク地区からの場合は不要としたこと等を受け 1.0億人と、2019 年清明節比約▲5%まで持ち直している。また、今秋には、国内旅行者数が例年約 8 億人と中国最大規模の大型連休である国慶節(10 月 1~7 日)が控えており、感染の再拡大がなければ更なる国内旅行者数の回復が期待できる。

中国文化観光省傘下の中国観光研究院は、2月下旬に今年の国内旅行者数を 41億人 (2020年29億人)、国内観光収入を3.3兆元(同2.2兆元)と予測しており、この予測に 基づくと国内観光収入の前年からの増収額が2020年の名目 GDP の約1%に相当する規模になる。今後も感染拡大抑止を維持することができれば国内観光業の回復は続き、家計が徐々にコロナ禍前と同様の消費形態を取り戻していく一助となろう。

7





(髙瀨 将平)

V. 中国

W. 原油

~原油市場を取り巻く環境(4月)~

1. 原油価格の推移

原油価格(WTI 期近物 1 バレル当たり)は、4月1日の OPEC プラスによる 5 月以降の協調 減産の段階的縮小決定に伴い 58 ドル台まで下落し、その後も英製薬大手の新型コロナウイ ルスワクチンと血栓との関連性に関する報道が景気回復への水差しを通じた原油需要下振 れを想起させ価格下押し圧力となったが、14 日に国際エネルギー機関(IEA)がワクチン接種 の加速を背景に今年の需要見通しを引き上げると上昇に転じ、足元では 60 ドル台前半で推 移している(第1図・上)。

2. 需給の動向

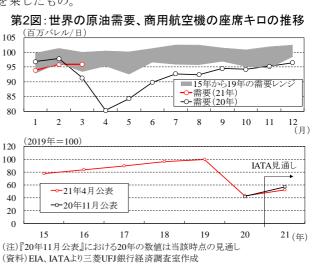
米エネルギー情報局(EIA)月報によると、3月の世界の原油需要量は日量9,600万バレル、供給量は同9,347万バレルとなり、需要超過幅は米南部大寒波があった2月比では縮小したものの、スエズ運河座礁事故による供給障害も影響し相応の水準で推移した(第1図・下)。

原油需要は、2 月まではコロナ禍前の 2015~2019 年のレンジ下限付近で推移していたが、世界経済持ち直しに伴い 3 月は同レンジ中央に近付いた(第 2 図・上)。もっとも、原油需要が順調に復調しているとみるのは早計だ。ガソリン需要低迷が続くほか、コロナ禍で大きな打撃を受けた航空需要に関しても、国際航空運送協会(IATA)の今年の世界の商用航空機座席キロ(注) 見通しを見ると、ワクチン普及や路線の運航再開が想定よりも遅れていることを反映し、依然 2019 年比で▲40~50%のレンジにあるためだ(第 2 図・下)。航空関連の原油需要は、景気回復に合わせ復調していくものとみられるが、コロナ禍前水準に戻るまでには猶も時間を要する可能性が高い。供給サイドでは、OPEC プラスの協調減産縮小(=増産)が予定されているほか、60 ドルを超えると持ち高調整の売りが生じ易い面もあることから、総合すると、原油価格は引き続き上値の重い展開となりそうである。

8

(注) 旅客輸送容量の単位。総座席数に輸送距離(キロ)を乗じたもの。





(布施 直樹、鷹巣 里奈)

VI. 原油

世界経済見通し総括表

		名目GDP	(2019年)	実質GDI	P成長率(前年	F比、%)	消費者物	価上昇率(前年	手比、%)
		兆ドル	日本=100	2019年 実績	2020年 実績	2021年 見通し	2019年 実績	2020年 実績	2021年 見通し
世界(名	界 名目GDPで加重平均)	142.0	2,605	2.7	▲ 3.4	5.3	3.5	3.0	2.7
	先進国・地域(表中)	52.9	971	1.6	▲ 4.8	3.7	1.4	0.7	1.1
	新興国(表中)	53.3	978	4.5	▲ 2.1	6.3	4.0	3.2	2.4
	その他	35.8	657	1.8	▲ 3.3	6.1	5.8	6.0	5.3
	日本(年度ベース)	5.5	100	▲ 0.3	▲ 5.1	3.6	0.6	▲ 0.5	▲ 0.1
	アジア11ヵ国・地域	45.2	829	5.0	▲ 1.0	6.8	2.9	2.9	2.1
	中国	23.4	429	6.1	2.3	8.3	2.9	2.5	1.5
	インド(年度ベース)	9.5	175	4.2	▲ 8.8	8.2	4.8	5.5	4.1
	NIEs4ヵ国・地域	4.6	85	1.7	▲ 1.0	3.5	0.7	0.2	1.1
ア	韓国	2.3	42	2.0	▲ 1.0	3.0	0.4	0.5	1.2
ジア	台湾	1.3	23	2.7	3.0	3.4	0.5	▲ 0.2	1.0
	香港	0.5	9	▲ 1.2	▲ 6.1	4.0	2.9	0.3	1.6
オセ	シンガポール	0.6	11	0.7	▲ 5.4	5.3	0.6	▲ 0.2	0.4
アニ	ASEAN5ヵ国	7.6	140	4.9	▲ 3.6	5.1	2.1	1.4	1.9
ア	インドネシア	3.3	61	5.0	▲ 2.1	4.8	2.8	2.0	1.8
	タイ	1.3	25	2.4	▲ 6.1	2.6	0.7	▲ 0.8	1.0
	マレーシア	0.9	17	4.3	▲ 5.6	6.5	0.7	▲ 1.1	1.4
	フィリピン	1.0	18	6.0	▲ 9.6	6.2	2.5	2.6	3.0
	ベトナム	1.0	19	7.0	2.9	6.8	2.8	3.1	3.1
	オーストラリア	1.3	25	1.9	▲ 2.5	3.6	1.6	0.8	1.3
	米国	21.4	393	2.2	▲ 3.5	4.1	1.8	1.3	1.7
	中南米6ヵ国	8.6	157	0.8	▲ 7.1	3.5	8.6	2.8	2.8
米州		3.2	59	1.4	▲ 4.1	2.5	3.7	3.2	3.5
	メキシコ	2.6	48	▲ 0.1	▲ 8.2	4.0	3.6	3.4	3.3
	アルゼンチン	1.0	19	▲ 2.1	▲ 9.9	3.5	53.5	36.1	50.0
	ユーロ圏19ヵ国	16.8	308	1.3	▲ 6.6	3.6	1.2	0.3	0.9
	ドイツ	4.7	86	0.6	▲ 4.9	3.4	1.4	0.4	1.7
欧	フランス	3.2	59	1.5	▲ 8.1	4.9	1.3	0.5	0.8
州	イタリア	2.7	49	0.3	▲ 8.9	4.4	0.6	▲ 0.1	0.7
	英国	3.3	60	1.4	▲ 9.9	4.9	1.8	0.8	1.2
	ロシア	4.1	76	2.0	▲ 3.1	2.5	4.5	3.4	3.4
	参考>								
	界41ヵ国・地域 G目GDPで加重平均)			3.2	▲ 3.4	5.1	2.6	2.0	1.8
(1)	1000 (加里下村)							i	

- (注)1.『2020年』の一部の国・地域は見込み値。
 - 2. 『名目GDP』は、購買力平価ベース。
 - 3. 『消費者物価』は、『日本』が生鮮食品を除いた総合ベース、『ユーロ圏』と『英国』がEU統一基準インフレ率(HICP)。
 - 4. 『日本』、『インド』の掲載数値は、『日本』の『名目GDP』を除き年度(4月~翌年3月)ベース。
 - 5.『世界』、『先進国』、『新興国』は、『日本』は暦年、『インド』は『名目GDP』のみ年度、その他は暦年の数値を基に計算。
 - 6. 『先進国』は、『日本』、『NIEs4ヵ国・地域』、『オーストラリア』、『米国』、『ユーロ圏19ヵ国』、『英国』。『新興国』は、『中国』、『インド』、
 - 『ASEAN5ヵ国』、『中南米6ヵ国』、『ロシア』。
 - 7. 『中南米6ヵ国』は、『ブラジル』、『メキシコ』、『アルゼンチン』のほか、コロンビア、チリ、ペルー。
- (資料)各国統計等より三菱UFJ銀行経済調査室作成

照会先:三菱 UFJ 銀行 経済調査室 (次長 鶴田)

TEL:03-3240-3204 E-mail:rei_tsuruta@mufg.jp

当資料は情報提供のみを目的として作成されたものであり、金融商品の売買や投資など何らかの行動を勧誘するものではありません。ご利用に関しては、すべてお客様御自身でご判断下さいますよう、宜しくお願い申し上げます。当資料は信頼できると思われる情報に基づいて作成されていますが、当室はその正確性を保証するものではありません。内容は予告なしに変更することがありますので、予めご了承下さい。また、当資料は著作物であり、著作権法により保護されております。全文または一部を転載する場合は出所を明記してください。また、当資料全文は、弊行ホームページでもご覧いただけます。

